

「空想部落 馬込文士村 -」特集

平成20年3月18日～平成20年7月27日



『空想部落』昭和11年刊行本

尾崎士郎記念館

「空想部落 馬込文士村 -」特集

士郎さんが昭和初期に居住した荏原郡馬込村（現東京都大田区南馬込）周辺には、多くの作家や画家が住み「馬込文士村」とよばれています。

今回の特集は、士郎さんの小説『空想部落』とその舞台となった昭和初期の「馬込文士村」について紹介します。

小説『空想部落』

『空想部落』は昭和11年1月から4月、朝日新聞夕刊に連載された作品で、同年7月に新潮社より刊行されました。何度か再販され、普及版が発刊されたほか、多くの装丁本が出版されています。また、昭和14年には監督千葉泰樹、主演千田是也で映画化されました。

『空想部落』の主舞台、馬込村は士郎さんが大正12年から昭和5年まで住居を定めた場所です。士郎さんが住みはじめたころのあたり一帯は、「九十九谷」と称されたように丘や谷が多く、雑木林も点在し、田畑も多いのどかな村だったので、小説では「牛追村」と紹介されています。

昭和2年から3年ころの馬込村は宅地化が進み多くの作家たちが居住し、愉快的時代をつくったようです。『空想部落』

の登場人物はそのころの士郎さんの仲間たちと思われ、士郎さんは「浮谷善兵衛」という作家として登場し、その家は「放送局」とよばれ、「村の出来事が残るところなく彼の書齋に伝達されるとこんどはそれが嘘と誇張にこねかえされてみるうちに村中にひろがってゆく。」と書かれています。実際に士郎さんの家は「馬込放送局」とよばれ、憩いの場所になっていました。また、士郎さんが馬込時代に知り合い、常に親交のあった榊山潤（彼も「坂貫源平」という洋画家として登場します）の小説『馬込文士村』によれば、士郎さんが「一杯やると誰彼の差別無く」馬込に居住することを勧めたようで、馬込の文士たちの中心にいたのは常に士郎さんでした。なお、士郎さんは『空想部落』の登場人物について、「別に特定の人間を念頭において書いたわけではない。」と語っています。

あらすじ 昭和初年の牛追村では、作家で「村長」とよばれる柿村保吉、浮谷善兵衛、坂貫源平などの作家や画家たちが住み、独特の雰囲気の中で青春時代を過していました。彼らがよく訪れたのが街道はずれの酒場「カスミ軒」でした。



『空想部落』昭和14年刊行本挿絵



『空想部落』昭和11年刊行本とびら

2年前までアンナン独立運動の指導者であったという書かざる作家横川大助は、「今は翼をもぎとられた鳥にひとしい身の上」で、愛人香島満子に泣きつかれ、牛追村を逃亡しました。

それから5年後「牛追村に町政が布かれ、大東京に編入された頃」、横川大助は牛追村に戻ってきました。彼はアンナン独立のために奔走しており、アンナンの王族をかくまったため刺客に狙われる身の上だとか、海賊に何度も襲われたり、張作霖の軍事顧問をしたなど、空想的な話がつきません。

あまりにも変貌した横川大助が帰ってきたことで、沈滞気味だった牛追村になにやら活気が出てきました。しかし、なぜか大助は債権者からこそこそと逃げ回ったり、仲間うちでは雄弁な彼が、学識者などとの対話では、思うように語れなくなってしまいます。牛追村の人々は、大助は大空想家ではないかと思いはじめていました。しかし、この話の最後はなんと・・・

「馬込文士村」

昭和初期の馬込村に多くの文士や芸術家たちがいつのまにか集まり、一つの集落を形成したため「馬込文士村」とよばれています。現在東京都大田区では旧馬込村を中心に山王・新井宿など隣接地域も含めて「馬込文士村」としてとらえています。士郎さん自身も実際には昭和3年末ころ、馬込村を出て東京市内や大森山王界隈を転々とします。そして、昭和7年「もっとも創作活動が旺盛だった」大森山王一丁目いわゆる源蔵ヶ原（現大田区山王一丁目）に居住します。「大森相撲協会」をつくるなど士郎さんにとって実に有意義な日々を送ったこの地の生活環境こそが、「馬込文士村」ではないでしょうか。そういう意味では、「空想部落」の住民とはこの源蔵ヶ原時代に関係した人を指すのかもしれませんが。

馬込時代の作品 士郎さんが馬込村に居住したのは大正12年9月でした。主な作品を紹介します。

大正14年8月、馬込村を主題としてはじめて書いた小説「窓にうつる風景」（『尾崎士郎選集第8巻』『尾崎士郎全集第6巻』所収）を『中央公論』に発表し、またそのころ、同人雑誌『不同調』の同人になっています。

昭和3年9月、「荏原郡馬込村」（『尾崎士郎選集第8巻』『尾崎士郎全集第6巻』所収）を『新潮』に発表しました。馬込村で親しかった詩人萩原朔太郎が登場します。

昭和4年10月、「ハンガア・ストライキ」を『文学時代』に発表します。作者の住所は、「東京市外馬込村中井1578」となっています。

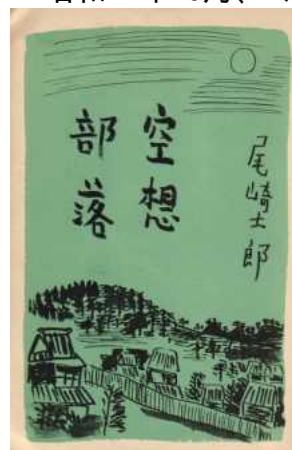
馬込時代を回想した作品としては、昭和9年8月に「九十九谷」を『行動』に発表していますが、この作品は昭和14年12月に刊行した短編集『九十九谷』の巻頭に所収されています。

また、昭和37年8月から12月にかけて「わが青春の町」を産経新聞に連載し、馬込村・源蔵ヶ原など思い出の地を述懐します。なお、『わが青春の町』は翌38年3月に刊行されました。

士郎さん最後の随筆『小説四十六年』でも馬込・源蔵ヶ原時代のことについて熱く語っています。



『空想部落』昭和14年刊行本表紙



『空想部落』昭和14年刊行本とびら

「空想部落」と土郎さん

土郎さんは「空想部落」について、「実在の世界でありながら、特殊な、時代的必然によってつながる雰囲気を書實的に描いた小説ではなく、一つ一つ、バラバラに離れている回想や、回想に歩調を合わせて出没する人間関係を、私のつくりあげた世界の中へ追い込んでいったというだけのものである。」と語っています。「空想部落」とは土郎さんの昭和初期の「馬込文士村」での生活環境そのものであり、土郎さんが隆盛を極めた時代ではないでしょうか。そして、その雰囲気のなかから『人生劇場』という最高傑作が生まれました。



『空想部落』執筆ころの土郎さん

「空想部落 - 馬込文士村 - 」特集の展示品目録

1 書籍	(『空想部落』 昭和11年刊行本)	1点
2 同上	(『空想部落』 昭和12年刊行普及版)	1点
3 同上	(『空想部落』 昭和14年刊行本)	3点
4 同上	(『空想部落』 昭和21年刊行本)	1点
5 同上	(『空想部落』 昭和37年刊行 200部限定本)	2点
6 同上	(『空想部落』 昭和37年刊行本)	1点
7 同上	(『わが青春の町』 昭和38年刊行本)	2点
8 同上	(『九十九谷』 昭和14年刊行本)	1点
9 同上	(榊山潤掲載『瓢々録』)	1点
10 同上	(榊山潤著『馬込文士村』)	1点
11 位置図	(馬込文士村略図)	1点
12 写真	(昭和初期馬込文士村関係写真)	5点
13 同上	(映画「空想部落」関係写真 昭和14年放映)	8点
14 新聞広告	(昭和11年7月27日東京朝日新聞 『空想部落』紹介)	1点
15 書籍チラシ	(『空想部落』 昭和37年)	1点
16 雑誌	(『新潮』 昭和11年8月号 『空想部落』紹介)	1点
17 同上	(『新潮』 昭和3年9月号 「荏原郡馬込村」所収)	1点
18 同上	(『不同調』 大正15年6月号 同人の一人に尾崎士郎)	1点
19 同上	(『文学時代』 昭和4年10月号 「ハンガア・ストライキ」所収)	1点
20 色紙	(「虚虚実実というけれど・・・」 尾崎士郎書)	1点
21 新聞掲載随筆	(昭和37年産経新聞 「わが青春の町」掲載)	1点
22 直筆書	(「空想部落」にまつわる思い出 千葉泰樹筆)	1点
23 水彩スケッチ	(「土郎さんの街」 日野耕之祐画)	1点
24 書簡	(昭和26年9月12日付、榊山潤宛 尾崎士郎直筆書簡)	1点
25 ポスター	(「馬込文士村展」 平成3年2月、大田区立郷土博物館開催)	1点
26 同上	(「尾崎士郎展」 平成7年2月、大田区立郷土博物館開催)	1点
27 書籍原稿	(榊山潤直筆原稿 『瓢々録』掲載)	1点